

Okabe Yukio_1948年群馬県生まれ。1967年騎手デビュー。1984年、シンボリルドルフとともに無敗のクラシック3冠を達成。数々の名馬に騎乗してGI^(*)制覇を成し遂げる。1985年からほぼ毎年海外のレースにも参戦し、日本騎手の海外遠征の先駆者としても知られる。2005年3月に引退後はJRAアドバイザーを務める一方、テレビの競馬解説でも活躍。



本物との出会いで自らの軸を確立
競馬の「名手」の地位を不動に

岡部幸雄氏

元騎手、JRAアドバイザー

CAREER CRUISING

キャリア・クルージング

Interview = 泉 彩子、大久保幸夫
Text = 泉 彩子 (66~68P)
大久保幸夫 (69P)
Photo = 刑部友康

キャリアとは「旅」である。人は誰もが人生という名の旅をする。人の数だけ旅があるが、いい旅には共通する何かがある。その何かを探するため、各界で活躍する「よき旅人」たちが辿ってきた航路を論考する。

1984年4月15日、千葉・中山競馬場。皐月賞を制覇した岡部幸雄氏は表彰台で1本指を掲げた。騎乗馬はシンボリルドルフ。岡部氏のパフォーマンスはルドルフとのタッグによるクラシック3冠^(※2)宣言であり、同年11月の菊花賞において、史上初の無敗での達成となった。ルドルフはその圧倒的な強さから「皇帝」と称され、1986年の引退時は多くのファンが涙を流した。岡部氏自身が中央競馬史上最高齢で引退したのは、それから19年後。「長く騎手を続けられたのは、ルドルフとの出会いがあったから」と岡部氏は競馬人生を振り返る。ルドルフは岡部氏のキャリアに何を与えたのだろうか。

岡部幸雄氏 キャリアストーリー

1948年	0歳	群馬県で生まれ育つ。実家は農家。馬も育てており、幼少期から馬に親しんだ。中学時代には自在に馬を動かせるようになっていた
1964年	16歳	馬事公苑騎手養成所に入所し、2年後に修了
1967年	19歳	騎手免許を取得。鈴木厩舎の所属騎手として3月にデビュー。5月初勝利、翌年12月重賞初制覇
1971年	23歳	優駿牝馬（オークス）優勝。クラシック初制覇
1972年	24歳	初渡米。日本国外の競馬で初めて騎乗する
1984年	36歳	シンボリルドルフに騎乗し、中央競馬牡馬クラシック3冠を達成。同年フリーランスの騎手となる
		 <p>1984年5月27日 日本ダービー。シンボリルドルフに騎乗し、単勝1.3倍の人気を受け、見事に優勝</p>
1987年	39歳	中央競馬における年間最多勝記録（当時）138勝を挙げる。年間最多騎乗（725回）も達成
1988年	40歳	レース中に落馬。3カ月の入院生活を送る
1995年	47歳	中央競馬初の通算2017勝を達成。以後、中央競馬における最多勝記録を更新し続ける
2004年	56歳	左膝の故障による休養から399日ぶりにレースに復帰し、優勝。中央競馬史上最高齢での勝利を達成する
2005年	57歳	騎手免許を返上し、騎手を引退

ゼロからのスタートで

騎乗の機会をつかみ、経験を積み重ねた

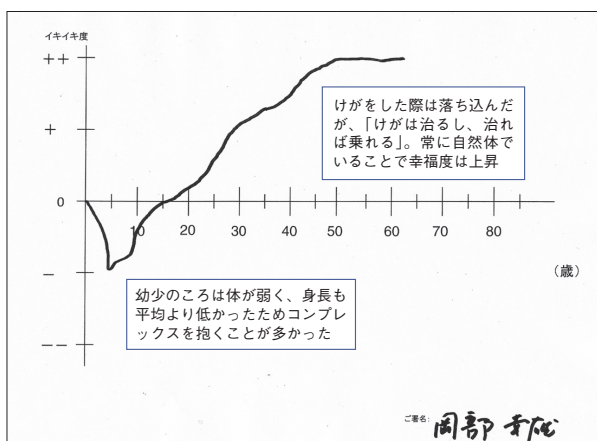
実家は農家。馬も育てており、幼いころから馬に親しんだ。小柄な体が悩みの種だったが、騎乗においては有利と知り、騎手を志した。中学3年生で馬事公苑騎手養成所に入所したときは手放して喜んだという。

だが、競馬界に縁故のなかった岡部氏には入所後の障壁も少なくなかった。同級生には競馬関係者の子弟もあり、教官からの待遇の差を感じることもあったという。「実習の馬からして違いましたね。私たちにあてがわれる馬はきちんと調教されていなくて、まともに走れない。自分で調教してはほかの馬を負かすしかないわけです。『格下の馬に乗っても、血統のいい馬には負けない』という心意気が育ったのは、そのおかげでしょうね」

当時、騎手になるには養成所修了後に厩舎に所属する必要があったが、これも縁故によるところが大きく、所属が決まったのは同期のなかで最後。養成所から紹介された鈴木厩舎に入り、騎手としてスタートを切った。騎手は馬主や、馬を管理する厩舎から依頼を受けてはじめて騎乗する機会を得る。デビュー当初は1、2週間騎乗できないことも珍しくなく、厩舎の掃除や先輩の手伝いなど下働きをしながらチャンスを待った。

「徒弟制度の世界でしたが、先輩たちの後ろ姿からレースへの姿勢など騎手としての基本を学びました。馬の世話をしつつ、馬主さんと先輩たちの競馬談義を聞くのも勉強になりましたね。隅にいる私に馬主さんが声をかけてくれて騎乗の機会をいただくこともありました」

騎乗すれば最善を尽くし、その日の結果を分析して次



直筆の人生グラフ。病気がちで運動もあまりできなかった幼少期が底。騎手を志してからは経験を積むごとに上昇。騎手引退後の現在は「横ばいかな」。

(※1) 宝塚記念、ジャパンカップなど競馬のなかで最も格付けの高いレースのこと。
(※2) 皐月賞、日本ダービー、菊花賞に加え、牝馬限定の桜花賞、オークス、の5競走。そのなかで皐月賞、日本ダービー、菊花賞の3競走に全て優勝した馬を3冠馬と呼ぶ。

に生かす。その積み重ねでレースの勘をつかんでいった。「人にも恵まれました。デビュー6年目の初渡米も、鈴木厩舎と縁の深い方に誘われて。米国の競馬の騎乗技術や、馬を大切にする姿勢には大きな影響を受けました」

名馬シンボリルドルフとの出会いで 本物とは何かを体得した

1984年にルドルフへの騎乗依頼を受けたのは、騎手17年目。勝歴800回の実力派騎手に成長していたが、最高峰のレースを大本命馬で勝つような派手な活躍はなかった。一方、ルドルフのオーナーは数々の名馬を輩出してきたシンボリ牧場。岡部氏にとって縁のない存在だった。「シンボリ牧場の馬には同期の柴田政人騎手がメインで騎乗していましたが、馬のスケジュールの都合で別の騎手を探すことになり、私に白羽の矢が立ったようです」

デビュー前の調教で2歳4カ月のルドルフに初めて乗った瞬間、競走馬としての欠点の少なさに驚いた。「最高峰のレースを狙える馬だと思いました。そう思ったのは私だけではないはずです」

競馬には調教師や厩務員、オーナー、獣医など多くの人が関わるが、名馬には同じ志を持つ人を引き寄せる力がある。その後のルドルフの活躍は既述の通りだが、それはチームワークの賜物といえるだろう。

岡部氏もルドルフとのレースにすべてを賭けた。鈴木厩舎を離れ、フリーランスになったのもルドルフに確実に騎乗できるようにするため。自ら環境を整えてすべてのレースに騎乗し、その成長の過程を共に走り抜けた。「ルドルフから教わったのは、最高の仕事、本物とは何かということ。馬をつくる、つまり育てるということに

みんなが高い意識を持って臨めば、強い馬が生まれ、最高のレースができるということを知ったんです」

なお、岡部氏は後にエージェント制を導入。騎乗依頼の対応やスケジュール管理を他者に任せることで、騎乗に専念できるようになった。当時は異端視されたが、現在の競馬界では普通のこととなっている。

長期スパンで馬を育て、結果につなげる その過程が「競馬」

ルドルフはアメリカ遠征でのレース中の故障がもとで引退を余儀なくされた。今だから明かせるが、実はルドルフの周囲は以前から異変に気づいていた。

「でも、ファンの期待も大きく、『やめよう』のひと言が言えなかった。いまだに悔やまれます」

目前のレースのために無理をさせ、馬の競走馬生命が絶たれることは珍しくない。何度も悲痛な思いを経験し、岡部氏は馬の視線を最優先に騎乗するようになった。馬にまたがった瞬間の微妙な差異に感覚を研ぎ澄まし、マイナス要素があればできる限りブレーキをかける。そして、馬の将来を見据えたレースを信条とした。

「競馬には馬券を勝ってくれるファンがいますから、もちろん全力は尽くします。でも、明らかに負けが確定しているときに馬に鞭を入れ続けるようなことはせず、レースというものを馬に教えていきました。すると、3、4カ月後にはその馬が頭角を現したりするんです」

ルドルフ引退後、岡部氏への騎乗依頼は飛躍的に増え、「名手」と呼ばれる存在に。当の岡部氏はルドルフのような馬に巡り会うことを期待して新馬戦の季節を迎え続けた。

「チームで馬を2歳、3歳と育て、結果につなげる。その過程が私にとっての競馬でした」

57歳で引退。騎手生活の間には復帰が危ぶまれる怪我もしたが、「けがはいずれ治る」と引退は考えなかった。その岡部氏が心を決めたのは、「思うような競馬ができないレースが2日続いたから」。中央競馬史上初の通算3000勝を目前にしていたが、記録にはこだわらず、迷いはなかった。中央競馬の生涯成績は騎乗回数1万8646レース、通算勝利数2943勝。引退の前年、55歳2カ月25日での勝利は中央競馬史上最高齢であり、その記録は2011年現在も破られていない。



■ 岡部幸雄氏のキャリアをこう見る

最高の名馬との出会いがキャリアの「転機」 先駆者としての行動の源にルドルフあり

大久保幸夫

ワークス研究所 所長

私をはじめて競馬を見た日（1985年3月31日）、シンボリルドルフが日経賞というレースに出場していた。それを話すと岡部氏は、「あまりの力の差に他馬が敬遠して、少頭数のレースになりました。みんな2着狙いで競争をしかけてこないで、本来逃げ馬ではないルドルフが逃げ切ったレースでした」と、楽しそうに思い出を語ってくれた。単勝1.0倍という驚くべき配当のレースだったが、ルドルフという馬のずば抜けた強さを素人の私もしみじみと実感したレースだった。

このルドルフとの出会いは、それからの騎手人生のすべてを変えるほど、岡部氏にとって大きな出来事だったという。

キャリアのなかにはさまざまな転機が訪れるが、最高のものとの出会いというのは、それからのキャリアを根本から変えてしまうきっかけになるものだ。

岡部氏の場合は、名馬ルドルフと出会ったことで、「またルドルフのような馬に出合えるかもしれないと思うから」38年間もの長きにわたって現役を続けることができたという。

ルドルフの活躍で、騎手としての名声が上がると、騎乗依頼も増え、実績も伸びて、中央競馬会での通算勝利回数2943勝という大記録につながった。

また、いつルドルフのような馬の騎乗依頼を受けてもそれに応えられるように、所属厩舎を離れフリーになった。そして馬のことだけに専

念できるようにエージェントに騎乗依頼の調整を任せることにした。これらは今でこそ当たり前になっているが、当時は競馬界に軋轢を生んだ先駆者としての行動だった。さらに、ルドルフとの出会いが、「馬、優先主義」という彼の信念・価値観にもなった。

岡部氏のホースマンとしての名声を形作る源を辿ると、そこに必ずルドルフがいるのである。

名馬との出会いは偶然にやってきたものだという。しかし、その背後には「彼に期待馬ルドルフを任せてみよう」とオーナーに思わせるだけの必然があったに違いない。人事を尽くした人にだけ、最高の転機がやってくるのである。

◆ キャリアの転機（岡部氏の場合）

